V. 資料いろいろ

喫茶わいがや 40 周年記念案内　77

国立市民文化祭での発表資料　78

〈サークル訪問358〉

喫茶わいがや

公民館にある小さな喫茶コーナー「わいがや」は、1981年公民館の青年室に集う若者たちの熱意から生まれ、以来しょうがいの有る人無い人の協同の場として若者たちが主体的に運営している。

創業40周年記念ブックレットがこの3月に発行され、5月の取材当日には記念シンポジウムが青年室をメイン会場にオンライン開催された。

青年室の若いお二人、大久保芽衣さん、入山頌さんが、現在の活動を発表した。そして神戸大学の津田英二さんがご自身の活動を振り返りつつ、学識的観点から未来へむけたお話をされ、その後、各チームに分かれての討議。青年室では討議というよりは、皆でワイワイガヤガヤの交流の時間に。

「わいがや」の設立に携わった平林正夫さんは、この空間は昔と変わらない……としみじみと。メンバーの星野大輔さんは、仕事帰りにコーヒーを飲みに立ち寄るのが楽しいと朗らかに。歓待の精神にあふれ、個々の自由闊達な様子と仲間との掛け合いに、自然と気持ちが解け、取材という立場を忘れるほど。この場所と人が織りなす居心地の良さ、これこそ、若者たちを引き付ける魅力だろう。

ブックレットは、わいがやホームページで読むことができる。また店内の「わいがや通信」「コーヒーハウス」の冊子も、是非ご一読を。わいがや発信物を彩る神谷（かみや）萌稲（もえね）さんの原画も飾られている。

喫茶で人気のチキンカレーは、岩手県宮古市のしょうがいしゃが働いている事業所からの取り寄せという。「わいがや」のつながりは広い。

一緒に活動してくれる仲間を募集中。コロナ下の現在、休業中だが、店内に活動紹介やメッセージボードを展示中。営業再開はホームページ等でご確認を。

営業時間：12時～18時（定休日：月）
URL：https://waigaya.online
連絡先：k_waigaya@yahoo.co.jp

〈文・写真　小林　栄子〉

40周年のシンポジウムで
ワイワイガヤガヤ

◀ホームページ
Twitter▶

—この「公民館だより」は再生紙を使用しています—

ブックレット『「思想」としてのわいがや』を発行し、記念シンポジウムを開催しました

喫茶わいがやの創設40周年を記念して、2021年3月にブックレット『「思想」としてのわいがや』を発行しました。このブックレットでは、長めの論文のほか、短めのコラム・メッセージを約40名の方に書いていただきました。

＜目次＞

はじめに ―このブックレットの趣旨について（井口啓太郎）
第１章 障害をめぐって
・錯綜する境界をみる ―コーヒーハウス活動を通じて（川田幸生）
・スキンシップとケアと「ケア」という言葉を使う私（末光翔）
・知的障害のある人びとの「自立」を支える仲間たちの挑戦（橋田慈子）
・私たちは「怒る」ことができるか（島本優子）
・障がい者を虐殺する国、その未来 ―相模原障害者施設殺傷事件と喫茶わいがやを通して見る2つの線（宇佐美理）
第２章 青年・若者をめぐって
・わたし視点のコーヒーハウス（和田萌花）
・若者の「生きづらさ」とコーヒーハウス実践（南出吉祥）
・綺麗事ではない〈共生〉から生まれる〈歓待〉の空気（阿比留久美）
・これは労働ではない ―喫茶わいがやについて（入山頌）
第3章 実践史をめぐって
・マイノリティをめぐる課題とマジョリティの学習・変容（島本優子）
・「障害の社会モデル」の教育実践論に向けて（津田英二）
・コーヒーハウスにおける「教育」の位置―平林正夫「たまり場」論ノート（青山鉄兵）
・国立五日制の会とくじら雲の歴史から考える ―せめぎ合う自由を共に生きること（加藤旭人）
・資料から振り返る国立五日制の会 ―「国立五日制の会と くじら雲の歴史から考える」資料解題（加藤旭人）
贈与としてのわいがや ―あとがきに代えて（入山頌）

※ ブックレットを冊子でお読みになりたい方は、公民館職員にお声掛けください。また、喫茶わいがやのホームページでも、ブックレットの全文を掲載しています。次のURLかQRコードからご覧ください。
https://waigaya.online/booklet/index.html

また、このブックレットの発行を記念し、オンラインシンポジウムも開催しました。1990年代から2020年代の現在まで、それぞれの年代にそれぞれの形で喫茶わいがやに関わり、実践や研究を重ねてきた3名の方から報告をしていただき、参加者同士で議論しました。

ブックレット発行記念オンラインシンポジウム
「わたしの『思想』をつくる ー喫茶わいがや・コーヒーハウスの実践を通してー」
・日時：2021年5月9日（日）13:00～15:00
・報告：大久保 芽衣さん（喫茶わいがやスタッフ、障害をこえてともに自立する会会長）
入山 頌さん（障害をこえてともに自立する会会員）
津田 英二さん（神戸大学）

※ シンポジウムの記録と報告資料は次のURLかQRコードからご覧ください。
https://waigaya.online/symposium.pdf

2021/11/23　第 66 回くにたち市民文化祭

シンポジウム　文化としての学びと公民館～コロナ禍で見えてきたもの～

新型コロナウイルスの蔓延下における喫茶わいがやの動き

障害をこえてともに自立する会　会長　大久保芽衣

1.喫茶わいがやとは

障害のあるなしに関わらず、ともに喫茶店を営む場

【場所】：国立市公民館の半地下にある市民交流ロビーの一角

【営業の開始】：1981/12/01

【運営】：市民団体「障害をこえてともに自立する会」

（会員は約 120 名。（2021 年時点））

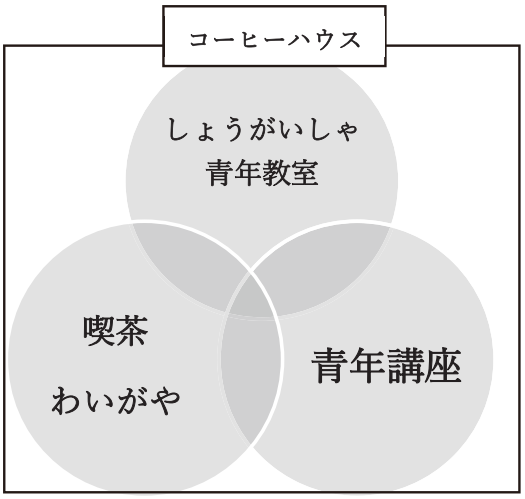
【目的】：（障害をこえてともに自立する会　規約原案より）

①本会は国立市青年学級（コーヒーハウス）及び国立市障害者青年学級の活動を充実、発展させるための自治活動を行う。

②本会は「障害者」「健常者」の差別なく、ともに働き生活できる地域をつくる活動を行う。

③本会は住民ひとりひとりが「障害」の問題を自覚し、上記 2 項にあげる地域づくりに自主的に参加するよう働きかける。

【活動の形態】



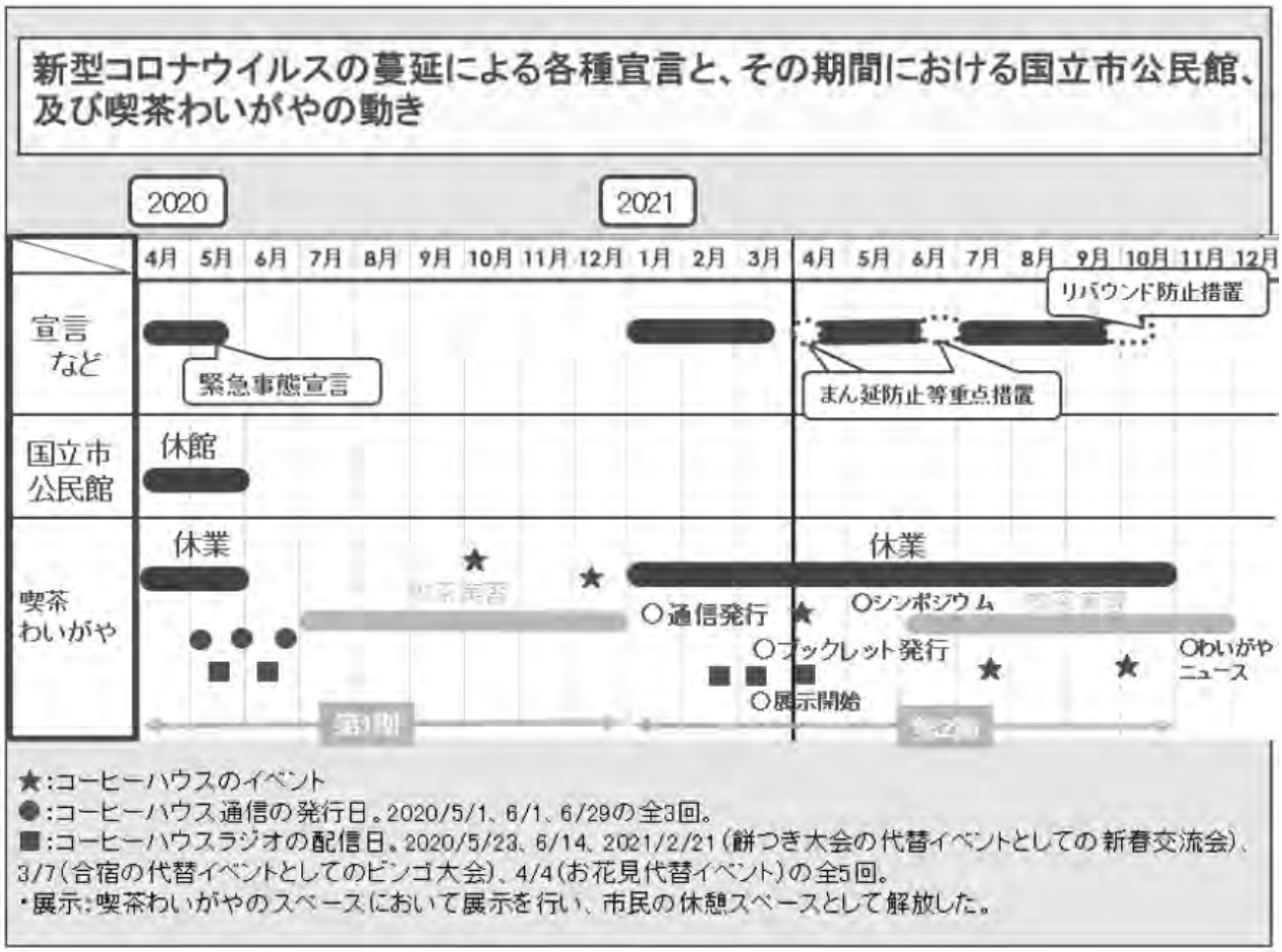
・コーヒーハウス：「しょうがいしゃ青年教室」「喫茶わいがや」「青年講座」の 3 つの活動によって構成される空間。

・しょうがいしゃ青年教室：しょうがいの有無にかかわらず共に活動を楽しむ空間。7 つのコースに分かれて活動。

・公民館 1 階ロビーにある喫茶店。しょうがいしゃ青年教室の喫茶実習の場でもある。

・コーヒーハウスの人々が自由に講座を企画・開催し、学びあうことができる空間。

2.新型コロナウイルスの蔓延下における状況



○喫茶わいがやの動きの比較

喫茶わいがやの動きは、大きく分けて 2 期に分けることができると考える。

第 1 期：第 1 回緊急事態宣言(2020/04/07)～第 2 回緊急事態宣言発令直前(2021/01/07)まで

第 2 期：第 2 回緊急事態宣言(2021/01/07)～リバウンド防止措置終了(2021/10/24)まで

第 1 期

2020/04/26 に職員主導でコーヒーハウス全体のスタッフミーティングがオンラインで開かれ、公民館休館という状況に対する問題意識の共有がされる。

・障害をもつコーヒーハウスの一員（以下「メンバー」）が自粛によってストレスに晒されているということ

・場が失われた今だからこそ、繋がりを持ち続ける必要性があること

・何かをする際には、誰も取り残さないように配慮すること

→以上の話し合いより①コーヒーハウス通信の発行、②コーヒーハウスラジオの配信、の企画が立てられ、実行された。

①**コーヒーハウス通信**：コーヒーハウスに関わる人々からメッセージを集め、コーヒーハウス通信として発行。PDF と紙の両方の媒体で送付。

②**コーヒーハウスラジオ**：コーヒーハウス通信に寄せられたメッセージをもとにスタッフ２名がトークし、その内容を YouTube でライブ配信する取り組み。

→どちらの活動も盛り上がりを見せ、概ね成功に終わる。

第２期

〇第１期との違い

＊喫茶実習及びしょうがいしゃ青年教室の活動に関しては公民館の判断との兼ね合いもあり。

・公民館は休館していない。→喫茶わいがや休業はスタッフの意思

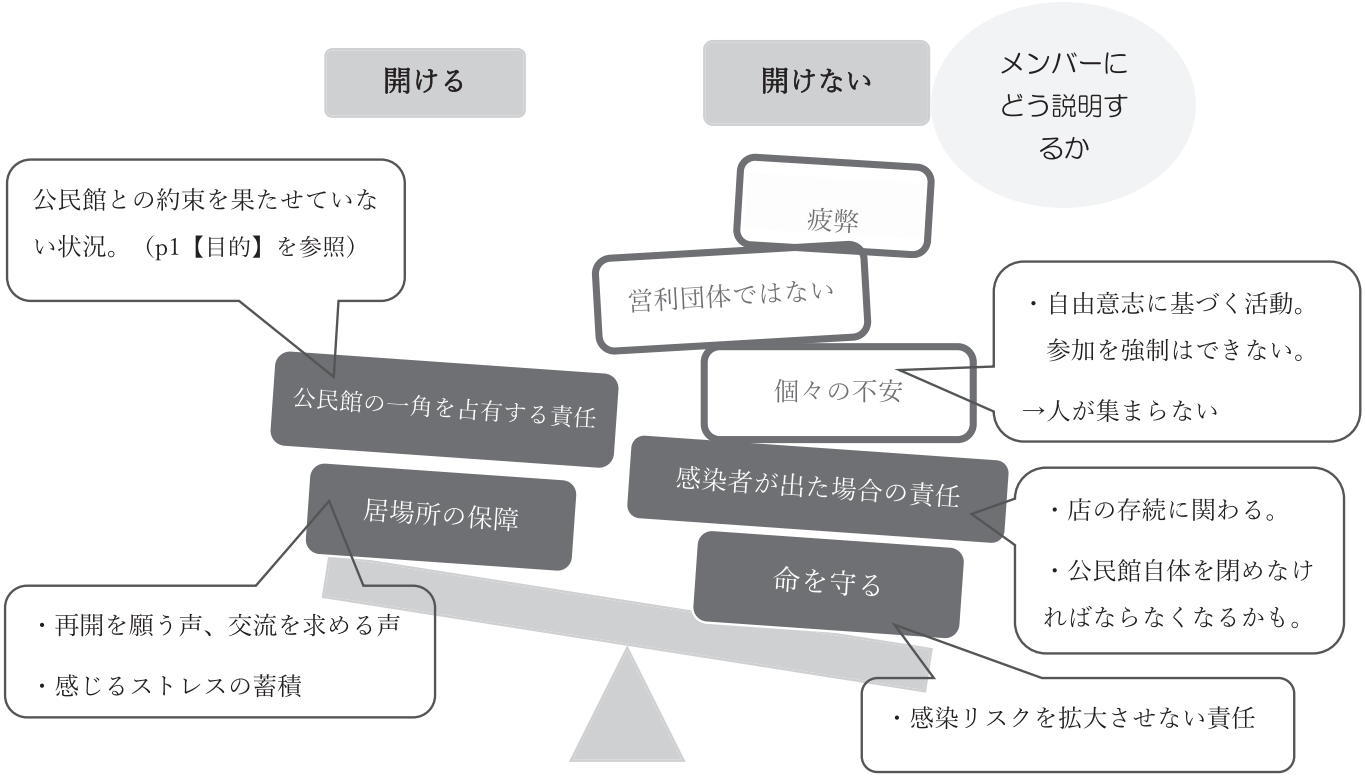
・コーヒーハウスラジオは、コーヒーハウスの行事の代替イベントとして行われている。

・先行きの見えなさ

〇休業について

・定期的に喫茶の再開については話し合われていたものの、緊急事態宣言中に店を再開するという判断をすることは出来なかった。→再開の判断基準は新型コロナウイルスの状況次第であった。

【休業に関する葛藤】



〇試み

●新規事業として喫茶スペースを使った展示を開始。（2021/03/16~10/30）

目的：（略）移動制限、外出自粛が生じた際に、しょうがいしゃが地域に出ることに対する社会的障壁を今一度捉え直し、それを軽視することなく、当事者ひとりひとりの地域活動を支えるための体制を整えること。

（事業案より引用）

・市民の休憩スペースとしても解放。

・メッセージボードを設置し、交流を図った。

→喫茶わいがやの存在を地域に示し、また、コーヒーハウスメンバー内でのある程度の交流を促すことは出来たが、それ以上の活動の盛り上がりを生み出すことは出来なかった。

●店を閉店したままでの喫茶実習の再開(2021/6~10)

・コーヒーのハンドドリップの練習や接客のロールプレイングを行った。

・生活課題の共有の場にもなった。

3.考察

【問題の顕在化】

新型コロナウイルスの蔓延によって、喫茶わいがやは今までにない状況に対峙した。その中で見えてきたものとは、「変化」ではなくて、もともとあった問題が顕在化したものであると言えるのではないだろうか。今回、顕在化した問題として、以下の 3 点が挙げられる。

①繋がりの偏り

喫茶わいがやでは、休業中においても繋がりを維持するためにいくつかの試みを行った。それらを振り返ると、(1)もともと関係性が築かれている、(2)オンライン機器を使用できる、という 2 点の要素が満たされていなければ試み自体に参加出来ない状況があったと考えられる。2 点の要素が満たされているコーヒーハウスメンバーにおいては、自粛期間中にも密に連絡を取り合い、試みにも円滑に参加してもらうことが出来、（対面時と同等とは言えないまでも）繋がりを保ち続けることが出来た。SNS 等を通した会話も活発になり、ある意味では繋がりがより深まったといえる。しかし、日頃の関わりも少なく、オンライン機器の使用が苦手なメンバーにおいては、ほとんど為す術がなかった。繋がることが出来た層と出来なかった層との差は顕著であった。

②「障害のあるなしに関わらず、ともに喫茶店を営む場」は本当か？

喫茶わいがや休業の判断に障害当事者は関われていない。障害当事者のコーヒーハウスメンバーより喫茶再開を望む声は多く寄せられたものの、その声を直接意見として表明する場はなかった。現在、喫茶わいがやの「スタッフ」として店を運営しているメンバーに障害当事者はほとんどいない。喫茶の運営方針を決める「わいがやミーティング」に障害当事者の出席はなく、喫茶わいがやの事務的な情報についても「スタッフ」以外には基本的に共有されていない。喫茶わいがやは「障害のあるなしに関わらず、ともに喫茶店を営む場」として活動できているのだろうか。同じようにこの場を大切に思っているであろう障害当事者が、判断に加わることが出来ず、決定した判断を受け止めることしか出来なかった状況は問題ではないか。

③「社会教育の場は必要不可欠である」ことの揺らぎ

新型コロナウイルスの蔓延は、さまざまな影響を与えた。先行きの見えない不安に加えて、職場や生活環境の変化を余儀なくされたり、人との繋がりが希薄になったり等の状況下で、喫茶わいがやという場が保障してきた「居場所」や「人との繋がり」は、切実に求められていたものであったと言えるだろう。しかし、喫茶わいがや休業期の第１期と第２期を比べても分かるように、関わる人の余裕が無くなってくると、喫茶わいがやにおける活動は失速し、時には停止してしまった。本来、一番力を発揮するべき非常事態の際に活動が閉じてしまったのだ。私含めコーヒーハウスメンバーは普段、この場がいかに重要で、大切なものであるのかを訴えてきた立場である。だが今回の件を通して、図らずもその活動は、家族や職場、自分自身より優先するものではなかったという現実を自ら証明してしまったとも言える。この活動が労働ではなく、それぞれの思いによって支えられている活動であるからこその脆さであると思う。また、活動の影響がなかなか見えづらいという部分も後回しにされる要因であるように思える。これは良い影響に関しても言えるが、その活動が失われたことによる負の影響に対しても言える。それがなくなっても、なんとか日常が回っているように見えてしまうのだ。これらのことは、喫茶わいがやだけではなく、社会教育の領域にある多くの活動が直面せざるを得ない問題であると思う。

【おわりに】

ここまで、自身の立場を「活動を支える支援者」的な立ち位置として語ってきてしまったように思う。しかし、自身の過ごした新型コロナウイルス蔓延下を振り返ると、喫茶わいがやとしての公式の活動ではないものの、SNS を通した密なやりとり等を通して救われた部分も大きかった。コロナ禍以前に築いていた繋がりがあったからこそのものであるし、その繋がりは喫茶わいがやの活動を通して育まれたものである。つまり、この活動において自身は「支援者」に終始するものではなく、支え支えられる営みの「当事者」であるといことだけは改めて確認しておきたい。

また、コロナ禍の活動において大きな存在感を示したオンライン機器だが、（特に SNS については）今回のことで「もともとあった関係性を強固にする」という性質を実感させられた。オープンなようで非常にクローズドな世界であり、今回のような非常事態において、平時に全く関わりを持っていなかった人を急に繋げるのは難しい。このことはオンライン機器を扱えるかという当人の技術的な側面に限らない。非常時にどう動くべきかというより、通常時の活動の積み重ねが非常時に顕著に表れるということなのだと思う。

編集後記

文明が発達し、あらゆるものを記録できるようになりましたが、匂いというのは未だに記録できません。それでも、なるべく今のコーヒーハウスの“匂い”を伝えたいと思って作りました。読んだ方は是非、実際の“匂い”を嗅ぎに来てください。（優）

生きているのだから、生きることは生涯に渡るテーマのはずで、30 になった私は自分の人生について 1/3 をコーヒーハウスから学んできたことになる。失われ、離れていくことに執着すればするほど心が醜く歪んでいくのを目の当たりにしながら。変わりゆくものに手を加えるのは生命に対する冒涜である。（頌）

編集を通して、コーヒーハウスでの多くの出会いに感謝の気持ちでいっぱいになりました。出会い方そのものよりも、その人と向き合った上で、この出会いを大切にしようと思えることや、後に振り返ったときに、その出会いに感謝できることがとても尊いことなのだと改めて感じました。　（森本彩里紗）

コロナ禍でも公民館での学びをとめずに工夫して活動していることを、編集に携わったことで改めて感じました。どのような状況でもみんなで活動したいという思いが大事だと思いました。（横山茉央）

コーヒーハウス　73 号
（青年室活動 2021-2022 年度のまとめ）

編集　冊子コーヒーハウス編集委員
入山頌、片岡優、森本彩里紗、横山茉央
表裏紙デザイン　宗像　里奈
2023 年 3 月発行
国立市公民館　青年室
〒186-0004　東京都国立市中 1-15-1
℡　042-572-5141

わいがや
ホームページ

わいがや
Twitter
@k_waigaya

わいがや
Instagram
@k_waigaya

コーヒーハウス
Instagram
@coffeehouse_kunitachi

コーヒーハウス
Facebook